

演題名(和文):

大腿骨近位部骨折を発症した大脳皮質基底核変性症に対して回復期リハビリテーション病棟で入院加療を行った1例

抄録本文:

【症例】69歳、男性。約2年前に他院で大脳皮質基底核変性症と診断され、在宅療養を行っていた。

【現病歴】自宅で床からの立ち上がりの際に転倒、近隣の急性期病院に救急搬送され、右大腿骨転子部骨折と診断、入院となった。第6病日に観血的骨接合術を施行された。免荷中である第28病日に背部の褥瘡を発症、第57病日には尿路感染症を併発された。第60病日にリハビリ目的にて当院に転院となった。

【入院時】基本動作は、起居動作は監視、立ち上がりは軽介助、坐位保持は自立、立位保持は物的介助下で自立、移乗動作は軽介助、平行棒内歩行は軽介助レベルであった。背部にはポケットを伴う褥瘡を認めた。前医入院中に、元来認めていた右片麻痺、嚥下障害、構音障害の増悪を認め、意思疎通は困難な状態であった。

【経過】運動器リハビリを提供していたが、悪化傾向となっていた嚥下障害に対して言語聴覚士による介入も行い、自宅退院を目指して多職種間で連携を行った。70日間の入院加療後に自宅に退院された症例を経験したので、報告する。